

FIT 探究的な学習研究推進通信

Fukutomi Inquiry Learning Team

令和4年
3月11日
(金)
No.9

○令和3年度 第3回研究推進地域連絡協議会

2月18日(金)に、第3回研究推進地域連絡協議会がオンラインで実施されました。午後の研修では、「他校にも知ってもらいたい、頑張っている、異学年集団などユニークな取組をしている」ということで県教委から指名を受け、本校の取組を全体の場で発表させていただきました。福富小・中学校の職員の頑張りや伝わるように発表したつもりではあるのですが…。発表に向けて、資料集めや活動内容の確認など、たくさんの方にご協力いただきました。本当にありがとうございました。

午前の研修では、上智大学の奈須正裕教授に、「経験単元の指導に必要な教師のスキル」という題で講演をしていただきました。内容について、いくつか紹介したいと思います。

生活科・総合的な学習の時間の原点、その源流

生活科、総合的な学習の時間は安定期を迎えたと同時に、倦怠期(分かった気になっている)を迎えています。生活科、総合的な学習の時間は突然現れたものではなく、昔からあります。原点・源流を確認し、**今なお変わらないもの、未来に向けて新たに創造すべきもの**について、考えてみましょう。



○デューイ(1859~1952)の実験学校<シカゴ大学に開設 1896~1904>

独自の教育方法:学校の中に理想的な小型の共同社会をつくり、さまざまな仕事(オキュペーション)に取り組む中で、問題解決の経験を与え、しだいに洗練させていくもの。

著書「学校と社会」(岩波文庫・講談社学術文庫※こちらのほうが新しく読みやすいそうです。)

- ・糸紡ぎ…当時の花形産業、綿や羊毛(羊を飼うところからスタート!)で糸を実際に紡ぎます。
- ・椅子づくり…必要なものを自分たちの手と技術でつくる。小学校にも木工室がある。

「スロイド教育」アメリカの大量生産、大量消費に対抗(北欧・スウェーデンなど)

- ・料理…野菜作りから、食は人間の基本的な営み、そして料理は化学である。初心者向けの総合○
- ・家づくり…本格的な家づくり。構造を考えるためには物理の知識が必要。地域の自然条件に合った家を、その土地でとれる材料で作っていく。

見ていないものは作れない。食べていない料理は、レシピだけ見ても作れない。可能な限り自分たちの生活を実践し、その経験を通して学んでいく。

○めざそう 40人のタイヤのり 小学校2年生(昭和60年)※当時、総合はないです。

クラスの40人全員で一度にタイヤに乗りたい。(児童発信)実現のため試行錯誤していく。

- ・スパイクタイヤでは体育館のフロアが傷つくから、ピンを抜きたい。

→ピンを抜く道具をつくる。<理科:てこの原理>

- ・タイヤを安定させるために2個タイヤをつなぎたい。

→等間隔にボルトを打ち込むため、中心を確認コンパスを使用。<算数:図形,円>

○私たちの段ボール迷路 小学校2年生(昭和61年)

体育館をいっぱいに使って、段ボールで迷路をつくる。大きさやじょうぶさ、長さ、落とし穴やすべり台の工夫など、よりよいものを目指して作成していく。**スケールの大きさは大切。先生がどれだけ本物を目指すかが大切。先生が本気だと子ども達の本気になる。**

単元構成を、教材単元ではなく経験単元に

○教材単元と経験単元

教材単元:「系統的に配列された教材の一区分であって、例えば教科書の第1章、第2章というようなまとまり」(内容のまとまりが単元 教科学習は主にこちら)

経験単元:「児童生徒の当面している問題を中心にして、その解決に必要な価値ある学習活動のまとまり」(活動のまとまりが単元 探究的な活動はこちら)

○単元構成での流れ

教材単元:内容(まず教えたことが決まっている) → 活動 ⊖ 子ども

ここが難しい!導入の工夫が必要

全くダメにならない程度に調整することが先生の役目

経験単元:子ども(導入してはいけない) → 活動 ⊖ 内容(到達しなければ価値が薄い)

経験単元になれば自動的に探究になり、子どもが生き生きしてくる。

自分たちが望む生活の自力での創造

○学習とは「生活の拡充」重松鷹泰(教育学者 名古屋大学名誉教授)

「問題解決学習=探究」が学習展開の基本原則である。子どもたちが持ち合わせている知識・技能・見通しでは実現できない解決すべき「身近で切実な問題」の発生→問題解決の途上で、様々な知識・技能が学ばれ、思考や学びに向かう力が高まっていく。(前提として、意味のある活動であることが大切)併せて、教科学習での経験との関連も見えてくる。→教育の最終目標である、子ども自身による生活と科学の実践的統合がなされる。



○そのために大切にしたいこと

- ・子どもが本当に求める生活の創造になっているか?
- ・スケールやパワーにおいて、全力を要する水準になっているか?
- ・子どもたちの動きが、子どもの暮らしや学校生活、地域社会に変化を生み出すことを許容するデザインになっているか?(本気で変えようとしているか)
- ・教師や地域の大人が、子どもたちを「子ども扱い」していないか?
- ・問題解決の途上で学ばれる知識・技能を、学習指導要領や発達段階などを言い訳に制限していないか(教師側が学びを止めていないか)。
- ・教師の予測や願い、学校や地域の都合、従来の慣習等で、子どもたちの動きや発想を制限していないか。

○「生活の教育」という原則の確認

総合的な学習の時間で活動や学びがどんな方向に向かうか、いつまで続くか、最後はどうなるか…正確には予測不能。

そんないい加減なことでもいいの?「生活」だから当たり前。

先達の言葉

Learning by doing

(成すことによって学ぶ)

ジョン・デューイ(アメリカ哲学者・教育学者) みなさんは、羊毛(ウール)と綿(コットン)のどちらが糸として紡ぎやすいかご存知ですか?実は、綿のほうが、繊維が絡まりにくく、紡いでもすぐに切れてしまうため、高度な技術が必要なのだそうです。…ということは、糸の歴史を考えると…。実際に紡いでみないと分からない、経験から来る学びですね。なるほどー。